

第3章 松山市の歴史文化の特性

松山市は、氷河期には本州と陸続きでしたが、海進や隆起、沈降を幾度も繰り返した結果、東側に山地が連なり、重信川と石手川が形成した扇状地である肥沃な平野の先に穏やかで美しい瀬戸内海が広がる、現在の松山市の姿が形作られました。

この豊かな環境に抱かれて、紡がれた松山市の歴史文化の特性は、ワークショップや市民アンケート調査、協議会で出た意見を基にキーワードを整理すると、10のストーリーに整理できます。また、それらのストーリーは、さらに大きく3つの歴史文化の特性に括ることができます。

1つ目の特性は、「まちに息づき、今も愛されることば、いのり、くらしの文化」です。文学やことばの歴史文化や、松山で始まりいまも息づく四国遍路、日々の生活の中で連綿と受け継がれる祭りや祈り、食、娯楽など、松山に生きる人々が暮らしの中で育んだ歴史文化の特性が含まれます。

2つ目の特性は、「松山の礎を築いた先人たちの想いとくらし」です。瀬戸内海に勢力を拡大し物流と交流を進め、現在に残る文化財を多く生み出しただけでなく、都市形成や文化的背景の基礎を創出した中世忽那氏と河野氏の活躍や、松山城と城下町を形成し、文芸や芸能、行事など現代松山の骨格が出来上がった松山藩政期の伝統文化、小説『坂の上の雲』の舞台であり、鉄道や港湾、産業などをいち早く近代化させ現代に繋がる歴史空間を彩った近代など、政治的経済的な発展により形成された歴史文化の特徴とその源流に流れる先人の想いがこの特性に含まれます。

3つ目の特性は、「古くから、人々に選ばれ、人々が集まり、くらしが生まれた穏やかな海、豊かな平野、湧き出る湯」です。おおくにぬしのみこと 大国主命とすくなひこなのみこと 少彦名命の逸話が残り、神話の時代から多くの皇族や著名人が来浴しただけでなく、松山の歴史文化の形成に大きな影響を与えた道後温泉、瀬戸内海を通じた大和との交流の中で独自の発展を遂げた古代以前の黎明期、瀬戸内海を通じた海運や交流、交通により育まれた生活や文化、三津などの港湾都市の発展、人々の多様な暮らしを支えその舞台となった瀬戸内海の島々から高縄山塊を背後に広がる平野部という多様性に満ちた自然など、自然環境とその影響下で人々が生み出した歴史文化がこの特性に含まれます。

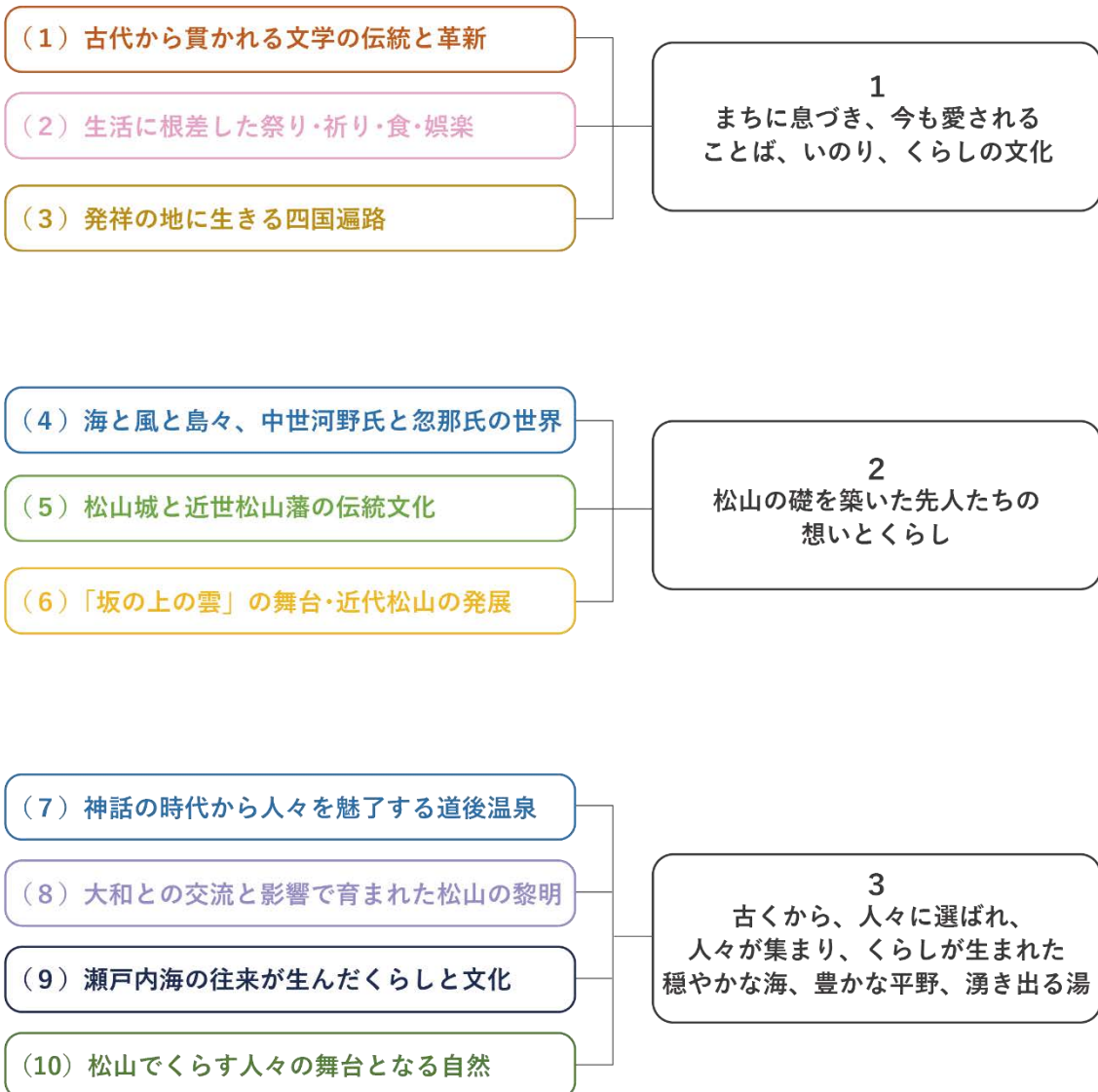
これら3つの特性は、それぞれ、松山市の歴史文化の土台となり、その土台を基に芽吹き発展し、その中で松山に深く根付き、現在も受け継がれるものであり、松山の過去と現在を表象し、未来につながるものといえます。

[本市の歴史文化の特性を示す10のストーリーの考え方]

| 時代の軸 | | キーワード軸 (ワークショップや協議会で把握した「松山市民がどのように松山の歴史や文化を捉えているのか」を示すキーワード) | | | | | | | | | |
|---------|--------|--|------------|--|-----------------------------------|---|------------------------------------|---------------------------|---|---------|------------------------------------|
| | | 産業・生業 | 交通 (鉄道・海運) | | 河野氏 | 道後温泉 | 松山城 | 人々の暮らし | | | |
| | | | 鉄道・陸路 | 港町・海運 | | | | 文教・俳句 | 遍路 | 祭り・民間信仰 | 食文化・人々の娯楽 |
| 時代不明 | | (6) 「坂の上の雲」の舞台 近代松山の発展 | | | | | (3) 発祥の地に生きる四国遍路 | | | | |
| 現代 | 平成・令和 | | 坊っちゃん列車復活 | (9) 瀬戸内海の往来が生んだくらしと文化 | 道後温泉本館の重要文化財指定 | | (2) 生活に根差した祭り・祈り・食・娯楽 | | | | |
| | 昭和(戦後) | | 伊予鉄道全線が電化 | 瀬戸内海国立公園 | | 松山城跡の史跡指定 松山城天守の重要文化財指定 | 『坂の上の雲』 俳句ポスト 一草庵 『坊っちゃん』 | 坂本屋修復 | | | |
| 近代 | 昭和(戦前) | 鍵谷カナ頌功堂建設 愛媛県庁建設 | | | | | | | | | 大判焼き |
| | 大正 | 萬翠荘建設 伊予餅の生産増加 | | | | | | | | | 松山餅 |
| | 明治 | | 軽便鉄道開通 | 石崎汽船本社建設 高浜港開港 釣島灯台建設 | 道後温泉本館改修終了 | | 『ほととぎす』 愚陀仏庵 正岡子規 三輪田米山 | | 風早八十八か所 | えびす信仰 | 坊っちゃん団子 伊予源之丞 薄墨羊羹 |
| 近世 | 江戸 | 伊予餅 | | 忽那諸島が海上の参勤交代路に接する 三津の朝市 三津浜港が水軍の拠点に置かれる | 伊佐爾波神社 / 湯神社 | 松山城天守等再建 松山城天守等落雷により焼失 松山城工事完成 | 明教館 栗田樗堂 松平定直 | 常夜燈・道標建設 日本全国に遍路文化が広まる | 山口霊神 隠神刑部理 能・獅子舞 亥の子、おほんにゃさん、おひまち、庚申講 | | 辻能 五色そうめん 醤油餅 タルト 伊予万歳 |
| 中世 | 安土桃山 | | | [湯築城開城] | | (5) 松山城と近世松山藩の伝統文化 | | | | | |
| | 室町 | | | 三津の渡し 忽那氏が河野氏に従属 忽那義範が南朝方の水軍として活躍 会原城 | 河野通盛、高縄城から湯築城へ 河野氏の連歌が盛んに行われる | | | 石手寺本堂 | | | |
| | 鎌倉 | | | 弘安の役で忽那重俊、水軍として活躍 忽那氏が忽那島地頭に | 弘安の役で河野通有が活躍 河野通信ら承久の乱で敗北 | 一遍上人、湯釜の宝珠に「南無阿弥陀仏」を書く | | 石手寺二王門 太山寺本堂 | | | |
| 古代 | 平安 | | | 「忽那家文書」 忽那氏が水軍として勢力を持ち始める。(平安末頃) | 河野通信、壇ノ浦で平家を破る(伊予水軍活躍) 河野通清、敗北 | (1) 古代から貫かれる文学の伝統と革新 『源氏物語』・『雑芸催馬楽』に「伊予の湯桁」が登場 万葉集に道後温泉に関する歌が残る。 舒明天皇と皇后(のちの斉明天皇)が伊予温湯を訪れる。 聖徳太子、来浴 | | 衛門三郎の伝説 | 権練り 大注連縄張替 | | |
| | 奈良 | 伊予国に興福寺、薬師寺、法隆寺などの荘(庄)ができる。 | | | | | | | | | |
| | 飛鳥 | 久米官衙遺跡群成立 | | 熱田津 | | | 『伊予国風土記』 | | | | |
| 原始 | 古墳 | 久米、伊予、風早等の国造がおかれる。 葉佐池古墳 前方後円墳の朝日谷2号墳 | | (8) 大和との交流と影響で育まれた松山の黎明 | | | | ハツ塚群集古墳 | | | 北条綱めし |
| | 弥生 | 松山平野に本格的な定住生活が始まる(文京遺跡等)。 | | | | | | | | | |
| | 縄文 | 松山に稲作が伝わる(安城寺町、船ヶ谷遺跡等)。 松山平野の人口が増える(遺跡数約30か所)。 | | | | | | | | | |
| | 旧石器 | (10) 松山でくらす人々の舞台となる自然 | | | | | | | | | |
| 地形や自然環境 | | 穏やかな海に点在する島々は、海岸からの眺め、航行する船からの眺めなど、角度や位置の違いによって、さまざまな多島海景観として眺望でき、こうした美しい地理的環境の一部は、瀬戸内国立公園として指定される。 東側に山地、重信川と石手川が形成した扇状地である肥沃な平野の先に、穏やかで美しい瀬戸内海が広がる。 氷河期には、本州と陸続きだったが、海進や隆起、沈降を経て、現在の松山市の姿が形作られた。松山市には、朝鮮半島と日本が陸続きであった頃に分布したといわれる、イノシメやエヒメアヤメが生息している。 | | | | | | | | | |

(注) この表に示すキーワードは、ワークショップ等での意見をまとめたものであり、歴史的な事実を示したものではありません。

[歴史文化の特性を示す10のストーリー同士の関係]

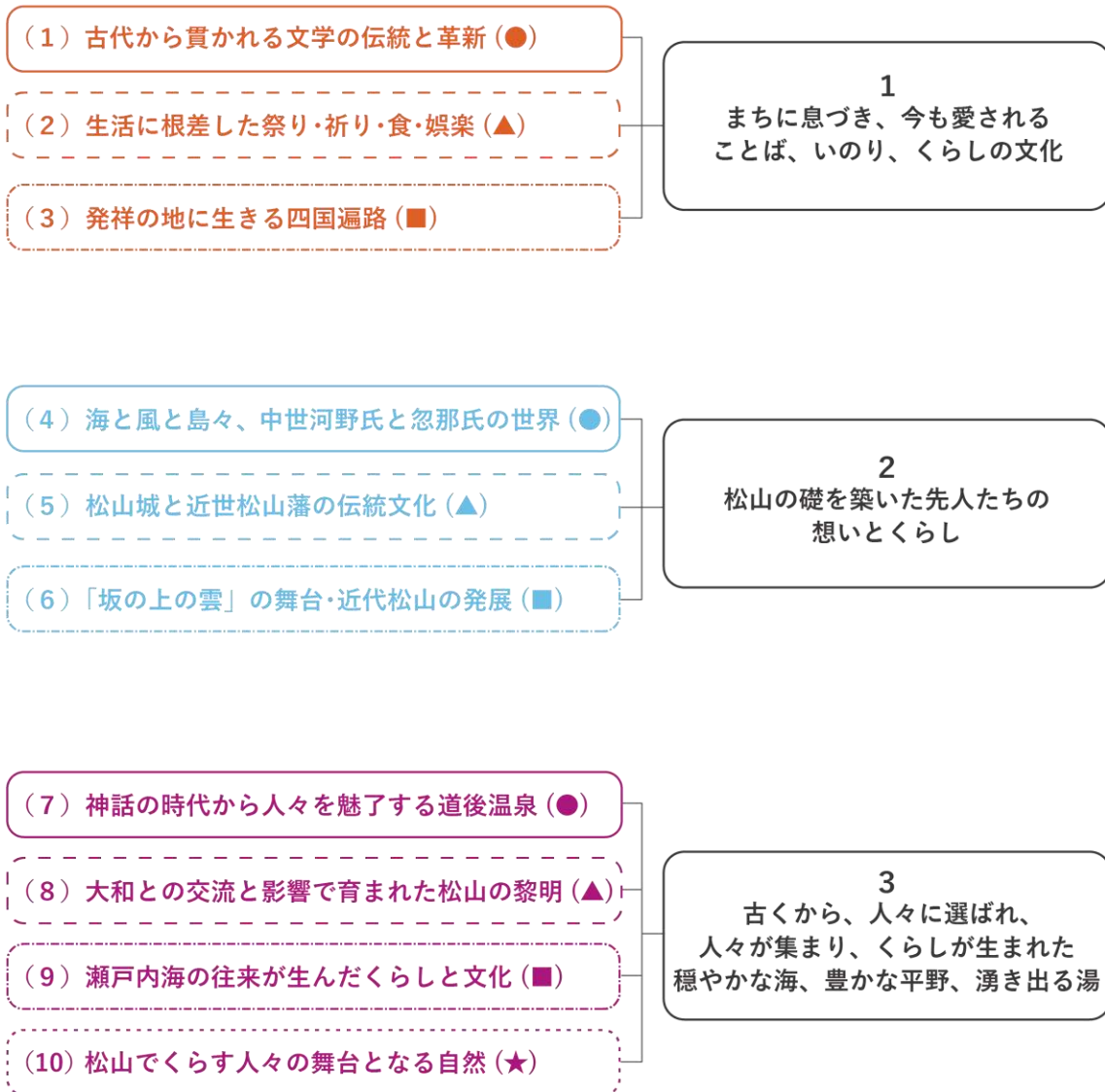


本市の歴史文化の特性を示す10のストーリーの考え方] (カラーバリアフリー表記)

| 時代の軸 | | キーワード軸 (ワークショップや協議会で把握した「松山市民がどのように松山の歴史や文化を捉えているのか」を示すキーワード) | | | | | | | | | |
|---------|--|---|--|-------------------------------------|--------------------------|--|--|----------------------|--|---|---|
| | | 産業・生業 | | 交通(鉄道・海運) | | 河野氏 | 道後温泉 | 松山城 | 人々のくらし | | |
| | | 鉄道・陸路 | | 港町・海運 | | | | | 文教・俳句 | 遍路 | 祭り・民間信仰 |
| 時代不明 | | (6) 『坂の上の雲』の舞台 近代松山の発展 (■) | | | | | | | (3) 発祥の地に生きる四国遍路 (■) | | |
| 現代 | 平成・令和 | ■坊っちゃん列車復活 | (9) 瀬戸内海の往来が生んだくらしと文化 | | | ●道後温泉本館の重要文化財指定 | | | (2) 生活に根差した祭り・祈り・食・娯楽 (▲) | | |
| 近代 | 昭和(戦後) | ■伊予鉄道全線が電化 | ■瀬戸内海国立公園 | | | | ▲松山城跡の史跡指定 ▲松山城天守の重要文化財指定 | ●▲『坂の上の雲』 ●▲俳句ポスト | | ■坂本屋修復 | |
| | 昭和(戦前) | ■鍵谷カナ領功堂建設 ■愛媛県庁建設 | | | | | | ●▲一草庵 | | | |
| 近世 | 大正 | ■萬翠荘建設 ■伊予餅の生産増加 | | | | | | | ●▲『坊っちゃん』 | | ▲▲大判焼き |
| | 明治 | ■軽便鉄道開通 | ■石崎汽船本社建設 ■高浜港開港 ■釣島灯台建設 | | | ●道後温泉本館改修終了 | | | ●▲『ほととぎす』 ●▲愚陀仏庵 ●▲正岡子規 ●▲三輪田米山 | ▲風早八十八か所 | ▲▲松山餅 ●▲坊っちゃん団子 |
| 中世 | 江戸 | ■伊予餅 | ■忽那諸島が海上の参勤交代路に接する ■三津の朝市 ■三津浜港が水軍の拠点に置かれる | (4) 海と風と島々、中世河野氏と忽那氏の世界 (●) | | ●伊佐爾波神社/湯神社 | ▲松山城天守等再建 ▲松山城天守等落雷により焼失 ▲松山城工事成 | ▲明教館 | ■常夜燈・道標建設 | ▲山口霊神 隠神刑部狸 ▲能・獅子舞 ▲亥の子、おはんやさん、おひまち、庚申講 | ▲辻能 ▲五色そうめん ▲醤油餅 ▲タルト ▲伊予万歳 |
| | 安土桃山 | | | ●湯築城開城 | | | (5) 松山城と近世松山藩の伝統文化 (▲) | | | | |
| | 室町 | | ■三津の渡し ●忽那氏が河野氏に従属 ●忽那義範が南朝方の水軍として活躍 ●会原城 | ●河野通盛、高縄城から湯築城へ ●河野氏の連歌が盛んに行われる | | | | | ■石手寺本堂 | | |
| 古代 | 鎌倉 | | ●弘安の役で忽那重俊水軍として活躍 ●忽那氏が忽那島地頭に ●「忽那家文書」 | ●弘安の役で河野通有水軍として活躍 ●河野通信ら承久の乱で敗北 | | ●一遍上人、湯釜の宝珠に「南無阿弥陀仏」を書く | | | ■石手寺二王門 ■太山寺本堂 | | |
| | 平安 | | ●忽那氏が水軍として勢力を持ち始める(平安末頃) | ●河野通信、壇ノ浦で平家を破る(伊予水軍活躍) ●河野通清、敗北 | (1) 古代から貴かれる文学の伝統と革新 (●) | | | | ■衛門三郎の伝説 | ▲權練り ▲大注連縄張替 | |
| | 奈良 | ▲伊予国に興福寺、薬師寺、法隆寺などの荘(庄)ができる。 | | | | | ●『源氏物語』・『雑芸催馬楽』に「伊予の湯術」が登場 | | ●『伊予国風土記』 | | |
| 原始 | 飛鳥 | ▲久米官衙遺跡群成立 | ●熱田津 | | | ●万葉集に道後温泉に関する歌が残る。 ●▲舒明天皇と皇后(のちの斉明天皇)が伊予温湯を訪れる ●▲聖徳太子、来浴 | | | | | |
| | 古墳 | ▲久米、伊予、風早等の国造がおかれる。 ▲葉佐池古墳 ▲前後円墳の朝日谷2号墳 | | | | | | | ■ハツ塚群集古墳 | | ▲▲北条鯛めし |
| | 弥生 | ▲松山平野に本格的な定住生活が始まる(文京遺跡等)。 | | | | | | | | | |
| | 縄文 | ▲松山に稲作が伝わる(安城寺町、船ヶ谷遺跡等)。 ▲松山平野の人口が増える(遺跡数約30か所)。 | | | | | ●『玉の石の伝説』 ●『白鷺の伝説』 | | | | |
| 旧石器 | (10) 松山でくらす人々の舞台となる自然 (★) | | | | | | | | | | |
| 地形や自然環境 | ★穏やかな海に点在する島々は、海岸からの眺め、航行する船からの眺めなど、角度や位置の違いによって、さまざまな多島海景観として眺望でき、こうした美しい地理的環境の一部は、瀬戸内国立公園として指定される。 ★東側に山地、重信川と石手川が形成した扇状地である肥沃な平野の先に、穏やかで美しい瀬戸内海が広がる。 ★氷河期には、本州と陸続きだったが、海進や隆起、沈降を経て、現在の松山市の姿が形作られた。松山市には、朝鮮半島と日本が陸続きであった頃に分布したといわれる、イヨスミレやエヒメアヤメが生息している。 | | | | | | | | | | |

(注) この表に示すキーワードは、ワークショップ等での意見をまとめたものであり、歴史的な事実を示したものではありません。

[歴史文化の特性を示す10のストーリー同士の関係] (カラーバリアフリー表記)



1 まちに息づき、今も愛されることば、いのり、くらしの文化

(1) 古代から買かれる文学の伝統と革新

「熟田津に船乗りせむと月待てば…」額田王の詠んだこの歌は、『万葉集』における代表的な1首であり、その舞台が松山です。また、『伊予国風土記』逸文には、聖徳太子が道後温泉を訪れ、その明媚な風光と泉質を絶賛し伊佐爾波岡に碑を立てたとあります。

『大山祇神社法楽連歌』には、室町時代の湯築城主河野教通をはじめとする河野家一門を主として、寶巖寺僧、石手寺僧などが参加した連歌が残されており、室町時代の松山で盛んに連歌が巻かれ近世俳諧に繋がる文学的素地が養われていたことが良く分かります。近世には4代藩主松平定直により蕉風俳諧しょうふうはいかいが流行、寛政7(1795)年には小林一茶が松山二畳庵主栗田樗堂を訪ねています。また、松山藩は文学や教育に力を入れ、藩校明教館を設け、文教豊かな地としての土壌を培いました。このような、古代から連綿と続く松山の詩歌や文学の伝統は、明治以降、俳句や短歌、文章の革新を目指した正岡子規を生み出し、子規の下には数多の俳人歌人文人が集い、その伝統は現在まで受け継がれています。

市内には、栗田樗堂の「庚申庵」、正岡子規と夏目漱石が52日間同居した「愚陀佛庵跡」、種田山頭火の「一草庵」などの文学遺跡に加え、多数の句碑・歌碑があり、その文学的豊かさを市内の随所で感じられます。また、登録記念物(名勝地関係)「四十島(ターナー島)」や「湧ヶ淵」など松山市内のいたるところで、その美しい風景について、著名な人々が詩歌を詠んでおり、穏やかな瀬戸内海と広がる平野に囲まれた松山市の地形や位置も、俳句をはじめとする文学が根付いた理由のひとつとして考えられます。

(2) 生活に根差した祭り・祈り・食・娯楽

古代から続く人々の営みは、松山の風土に生まれ、独自の生活文化を生み出しました。信仰や畏怖、伝承の対象としての社寺や像、天然記念物など形のあるもの、踊りや行事など形のないもの、このほかにも多くの祈りや祭りが受け継がれています。また、芸能などの娯楽や食など人々の暮らしに根差した文化が生活と一体となり受け継がれ親しまれており、これらはすべてが松山を形作る重要な要素であり、松山の持つ価値といえます。

松山を代表する祭礼行事としては、河野水軍の戦勝奉賛に源流を持つといわれる「鹿島の櫓練り」や「興居島の船踊り」が挙げられます。秋季祭礼では、一般的に神輿渡御、獅子舞奉納が行われ、旧北条地域では「だんじり」の運行が行われます。また、八反地の國津比古命神社くにつひこのみことの「神輿落とし」や、勝岡町の勝岡八幡神社の「一体走り」、北条の「神輿みそぎ」、安城寺の「川狩り」、道後・三津・古町などの「鉢合わせ」といった特徴的な神輿渡御が伝わるほか、古三津では獅子舞ではなく加藤嘉明が朝鮮半島で行った虎狩がモチーフと伝わる「虎舞」が奉納されます。そのほか秋季祭礼で行われる行事としては、旧中島地域の「おみどり神事」や宇和間の「やっこ振り」などが挙げられます。年中行事としては、「亥の子」や「日待講」、「庚申講」などが行われるほか、「はんにゃ」や「弓祈禱」など独特な行事が伝承される地域も多くあります。

信仰の点では、地区毎に仏堂を結び信仰されることが多いことが特徴として挙げられます。旧北条地域には特に仏堂が多く、これらの諸堂と寺院を結んだ風早八十八か所霊場が設けられています。また、垣生地区では、諸堂を結んだ西国三十三所観音霊場の写し霊場が設けられているほか、興居島と睦月島では島四国が設けられ信仰を集めています。

芸能では、松山を代表する祝福芸である「伊予万歳」や、人形浄瑠璃の「伊予源之丞」などが伝わるほか、江戸時代の松山藩では能楽が大いに奨励され、町人を三之丸舞台に招いた町入能まちいりのうも盛んに行われました。

現在も、藩主松平家の所有していた面・装束など能道具の一部が東雲神社に伝わっており、東雲能が開催されるほか、二之丸薪能をはじめとして盛んに能が開催されています。

生活文化の点では、食文化として近世には「五色そうめん」や「緋のかぶら」などが伊予節に謡われました。また、藩主松平定行が長崎から持ち帰ったというタルトや醤油餅も近世に成立した菓子で現在も銘菓として親しまれています。近代以降では、夏目漱石の小説『坊っちゃん』にちなみ考案された「坊っちゃん団子」が広く知られているほか、大正時代の一銭洋食に源流を持ち、独自に発展したお好み焼の一種である「三津浜焼き」が地域の食文化として親しまれています。さらに、鯛一匹を丸ごと炊き込む「北条鯛めし」は、神功皇后の説話が残る郷土料理であり、三津浜焼きとともに文化庁の100年フードに認定されています。

(3) 発祥の地に生きる四国遍路

45番岩屋寺から讃岐街道三坂峠を越えると、一気に松山平野の眺望が開けます。この眺望について、寛政12(1800)年に刊行された『四国遍礼名所図会』では「松山の城、道後の町、伊予の高根、みたらへ、雄戸の瀬戸、下の関、三ツケ浜、絶景いわんかたなし」と賞賛されています。三坂峠から46番浄瑠璃寺に下る急坂は、昔行商の金物屋が転んで鍋を割ったことから鍋割坂と呼ばれ、下れば元遍路宿の坂本屋が遍路を迎えますが、この三坂峠越えから坂本地区にかけての遍路道は、近世の旧状を良く残しています。

浄瑠璃寺から47番八坂寺へは1km 足らずで、このあたりの久谷地区には、遍路発祥説話である衛門三郎に関する伝承地が残されています。衛門三郎の屋敷跡である文殊院や、亡くなった8人の子供の墓といわれる「ハツ塚群集古墳」、三郎が巡礼を始める際に名札を納めた「札始大師堂」がこれにあたります。また、51番石手寺は、安養寺あんようじと称していましたが、衛門三郎が弘法大師の許しを得て生まれ変わった河野息方こうのおきかたが左手に握り生まれてきた石が納められ、石手寺と号を変えたと伝わります。

四国遍路発祥の地である松山市には、四国遍路札所が所在する自治体で最も多い8か寺が所在しており、数多くの文化財が伝わります。

石手寺には国宝「石手寺二王門」をはじめとする鎌倉時代の諸堂が残されており、6棟が重要文化財に指定され、二王門とともに伝わる重要文化財「木造金剛力士立像(二王門安置)」をはじめとする多くの工芸品や絵画、古文書が残されています。49番浄土寺には、文明14(1482)年に河野通宣が再建した「浄土寺本堂」と「木造空也上人立像」が伝わり、いずれも重要文化財に指定されています。また、52番太山寺には、国宝「太山寺本堂」と重要文化財「太山寺二王門」が所在し、重要文化財「木造十一面観音立像」(7軀)をはじめ、県指定有形文化財「木造五智如来坐像」、未指定ながら「不動明王坐像」、「金剛力士立像」など平安時代に作られた数多くの彫刻が伝わります。53番円明寺の県指定有形文化財「木造阿弥陀三尊像のうち両脇侍立像」には、建長2(1250)年7月の年紀が残されています。その他、札所に伝わる文化財は、近年世界遺産登録を目指す愛媛県の調査により、その詳細が明らかになりつつあり、各札所の国史跡「伊予遍路道」への追加指定が進んでいます。

また、札所に限らず、市内には四国遍路にまつわる有形無形の文化財が数多く残されています。まず、遍路道については、主要な街道のほとんどが舗装された幹線道路となりましたが、先述の三坂峠越えから坂本地区にかけてなどの近世・近代からの旧状や景観が残されている箇所もあります。また、市内各所に現在も数多くの道標や常夜灯が残され、地域で管理されており、歩き遍路を導いています。

遍路を取り巻く生活文化としては、「お接待」が挙げられます。弘法大師と「同行二人」の旅を続ける遍路に対して有形無形の様々な喜捨や施しを行うことで弘法大師の功德を得る、あるいは遍路を応援するための施し行うことは「お接待」といわれ四国各地に残されます。松山市内でも様々な「お接待」が行われており、

坂本地区の坂本屋のように定期的に接待を行う接待所が設けられる例もあります。このような遍路への「お接待」やもてなす心は、今も松山人の気質に深く根付いています。

2 松山の礎を築いた先人たちの想いとくらし

(4) 海と風と島々、中世河野氏と忽那氏の世界

平安時代末期から中世にかけて、忽那諸島と風早地域、松山平野では、海上勢力として河野氏と忽那氏が大きく活躍しました。忽那氏は、開発領主として忽那諸島を開き、鎌倉時代には本領安堵の御家人として活躍、室町時代を通じて海の領主として活躍しており、その歴史は重要文化財「忽那家文書」が詳細に伝えています。また、河野氏は伊予水軍を率いて源平合戦に出陣し功績をあげ、盛衰を繰り返しながらも風早地域を本貫とし松山平野に支配を広げ、湯築城を築き、政治・経済・文化の中心地として道後を発展させました。

忽那諸島には、忽那氏の居城であった^{もとやまじょう}本山城・^{たいのやまじょう}泰山城・^{くだこじょう}九多見城など多くの城館が残されています。長師の^{しんぶくじ}真福寺には貞治2(1363)年の紀年銘を持つ板碑が残され、市指定有形文化財に指定され、また、小浜には文中元(1372)年の紀年銘を持つ板碑が残され、県指定有形文化財に指定されています。貞治は北朝方、文中は南朝方の年号であり、忽那義範が南朝方の懐良親王を援けて大活躍した1340年～1350年代の直後に双方の紀年が残されていることは大いに注目されます。その他、忽那諸島には「忽那家文書」と共に忽那氏の活躍を伝える「長隆寺文書」や室町時代初期の「宝篋印塔」をはじめとした石造塔など中世の文化財が各地に残されています。

風早地域には、高縄山城^{えりようじょう}、恵良城、横山城^{かしまじょう}、鹿島城、善応寺^{ぜんのうじ}といった河野氏の代表的な城館が残り、道後平野においても湯築城、港山城、荏原城など城館が残されており、中世における河野氏による支配と動乱期の松山の様相をうかがい知ることができます。また、国宝「石手寺二王門」と「太山寺本堂」の建築をはじめとする寺院の整備や道後温泉の整備、連歌をはじめとする文芸の振興など、河野氏の残した文化財は松山の歴史文化の骨格を形成しました。

「湯築城跡」や「南江戸鬮目遺跡」からは、全国各地の陶磁器と共に多量の貿易陶磁器が出土しており、松山で非常に広範囲の物流が行われたことが明らかになっています。物流拠点であった南江戸の大宝寺には、国宝「大宝寺本堂」と重要文化財「木造阿弥陀如来坐像」などが残されており、当時の経済力をうかがわせます。河野氏と忽那氏は、共に水軍を率いて数々の戦乱で活躍しただけでなく、瀬戸内海の潮流や潮風を巧みに利用した水運による経済活動により勢力を拡大しました。このような河野氏や忽那氏の活躍や生きざまは、松山のまちに息づいています。

(5) 松山城と近世松山藩の伝統文化

慶長5(1600)年、加藤嘉明が入部したことにより立藩した松山藩は、嘉明の転封により蒲生忠知が入部、断絶により松平定行が入部すると、以後は松平家により支配されました。加藤嘉明は松山平野中央の味酒山に松山城を築城、暴れ川であった湯山川(石手川)を南に付け替えることで平地を確保し、城下町を形成しました。松山藩政期は、都市形成と共に、社寺の整備や俳諧・能など文学芸能の振興、藩校明教館の設置など文教施策が実施され、近代・現代に繋がる松山の歴史文化の礎が形成された時期でもあり、町方が育み残したのものも含め、松山藩政期の文化財が今も数多く残されています。

松山のシンボルともいえる重要文化財「松山城」は、天守をはじめとする櫓・門など21棟が指定されています。松山城が旧国宝に指定される前の昭和8(1933)年放火により焼失した「小天守」ほか9棟、昭和20(1945)年戦災により焼失した「太鼓門」ほか10棟、昭和24(1949)年に放火により焼失した「筒井門」ほか2棟、その他6棟の計30棟が昭和43(1968)年~平成2(1990)年の間に順次木造復元されており、竣工後50年が経過し条件を満たしたものは国登録有形文化財に登録され、江戸時代の松山城の景観を伝えています。さらに松山城は本丸と二之丸の所在する城山と南西山麓に広がり堀と土塁に囲まれた三之丸の全域が国史跡に指定され、史跡公園として親しまれています。

また、城下町については、町割りと共に町名が残る古町や、外堀の跡地である東雲公園、御幸の寺町などに現在もその様相をうかがうことができるほか、町方の残した文化財として、栗田樗堂が味酒に結んだ「庚申庵」が県史跡に指定されています。城下外では、寛文7(1667)年、藩主松平定長により造営された「伊佐爾波神社」の社殿(本殿ほか)が重要文化財に指定されています。

先述したとおり、松山藩では、能楽が盛行したほか、俳諧が大いに流行するなど松山の芸能・文芸など無形文化財や民俗文化財の骨格が出来上がりました。市指定無形民俗文化財である勝岡八幡神社の祭礼行事「一体走り」もこの頃に行われた記録が残されています。このような、松山藩政期に生まれた伝統文化は、近代「坂の上の雲」の舞台へと繋がっていきます。

(6) 「坂の上の雲」の舞台近代松山の発展

明治維新後、松山は一気に近代化しました。明治21(1888)年には日本最初の軽便鉄道である伊予鉄道が松山-三津浜間に開通し、追って明治20年代末には道後鉄道が一番町-道後、道後-三津口間を結び、南予鉄道は松山-郡中間に開通しました。その後、松山電気軌道株式会社が設立、鉄道や電話、電気などのインフラ整備が進みました。横河原線には、明治25(1892)年に築造された柳井町の煉瓦橋(伊予鉄横河原線・第26号溝橋)や同年製造で現役の鉄道橋として最古のトラス橋である石手川橋梁が現在も活躍しており、明治32(1899)年の小野川橋梁もまた現役です。また、明治38(1905)年に竣工した高浜駅舎は、高浜開港の前年に新たな松山の顔として建築された洋風建築で、明治の歴史的景観を今に伝えます。さらに、夏目漱石が小説『坊っちゃん』で「マッチ箱のよう」と表現した機関車と車両は梅津寺公園に保存されており、「坊っちゃん列車(機関車・客車各一両)」として県指定有形文化財に指定されています。

江戸後期に鍵谷カナが作り出した伊予絊は、明治中期から大正にかけて最盛期を迎え、日本の絊生産の半分を占めるまでに成長、主要産業として松山の経済を下支えしました。鍵谷カナの墓は、伊予結城生産を改良し全国に販路を拡大した功労者である菊屋新助の墓とともに県史跡に指定されているほか、その功績を伝える「鍵谷カナ頌功堂」は国の登録有形文化財に登録されています。また、垣生公民館、白方興業株式会社、定秀寺、正賢寺には古布や生産用具が数多く保管されています。

近代には、西洋の新しい技術を取り入れた建造物が次々と建築されました。明治6(1873)年、釣島に県

内最古の洋式建築である釣島灯台と「釣島灯台吏員退息所及び倉庫」が、明治27(1894)年にはトラス式小屋組を採用した「道後温泉本館」神の湯本館が建築されました。大正以降には、木子七郎きごしちろうの設計により松山藩主家 久松定謨伯爵の別邸である「萬翠荘(旧久松家別邸)」が建設されたほか、「石崎汽船本社」、「愛媛県庁本館」、「鍵谷カナ頌功堂」が建築されました。こうした、近代化遺産や近代和風建築からも分かる急速な近代化は、小説『坂の上の雲』の舞台である松山の歴史空間を彩り、現代へと繋がる重要な要素であるといえます。

3 古くから、人々に選ばれ、人々が集まり、くらしが生まれた 穏やかな海、豊かな平野、湧き出る湯

(7) 神話の時代から人々を魅了する道後温泉

道後温泉は、『古事記』、『日本書紀』、『伊予国風土記』逸文に言及される日本最古の温泉の一つで、古代において数々の皇族の来訪譚が残されています。景行天皇と皇后、仲哀天皇と神功皇后のほか、聖徳太子、舒明天皇、斉明天皇、中大兄皇子、大海人皇子が来浴したとされ、僧の恵慈と葛城臣と共に道後温泉を訪れた聖徳太子は、明媚な風光に感激し、湯の岡に詩を刻んだ石碑を残したと『伊予風土記』逸文に伝わります。この碑文では、不老不死の霊泉のある神仙境と称えています。舒明天皇は皇后(後の斉明天皇)と共に舒明11(639)年伊予温湯宮に御幸しました。斉明天皇は中大兄皇子、大海人皇子と共に白村江の戦いの前、斉明7(661)年に石湯行宮に2か月間滞在しました。また、源氏物語空蝉の巻では「伊予の湯いよのゆ 榊歌さかきうた」を引用し、数が多い様に例えるなど、伊予の湯が慣用句として使われるほど広く親しまれていたことが分かります。

文保2(1318)年、河野通継みちつぐは「石手寺二王門」を建立し、その後も伽藍の整備を行ったと伝わります。建武年間(1334~1338年)、河野通盛は温泉の南に近接した伊佐爾波岡に湯築城を築城し本拠としたことから、東方の石手寺と河野氏の関係は強化され、湯築城と道後温泉、石手寺は、政治経済文化の中心地として中世を通じて発展を遂げました。河野氏と石手寺、道後温泉の関係を示す資料として、永禄5(1562)年12月21日付で河野弾正小弼通直により石手寺僧の入浴日を定めた、市指定有形文化財「石手寺制札」があります。

江戸時代に入り松平定行が入部すると、道後温泉の建物整備が行われました。松平藩政下ではこの後も温泉場の改修や建替えが度々行われており、増加する入浴客と老朽化に対応しました。その後、道後温泉は、明治22(1889)年に道後村から独立した道後湯之町が運営することとなり、初代町長伊佐庭如矢いさにわきやのもと、現在も残る「道後温泉本館」の建物の整備がはじまりました。明治25(1892)年養生湯の改築を皮切りに、明治27(1894)年に神の湯本館、明治32(1899)年に又新殿・霊の湯棟が竣工、その後も改築を繰り返し大正13(1924)年には玄関棟が整備され現在の姿に整いました。平成6(1994)年、これらの建物は重要文化財に指定されました。

このように、道後温泉は、時々において権力者の庇護を受けながら多くの人々の入浴の用に供され、愛されてきました。また、江戸時代以降では、小林一茶をはじめとして多くの俳人文人が来浴し、紀行文が執筆されたことからその魅力は全国の庶民にまで広がりました。道後温泉は古代から松山の最も核心的な要所であり、常に松山の歴史文化のシンボルとして多くの人々を魅了しています。

(8) 大和との交流と影響で育まれた松山の黎明

松山は、瀬戸内海の交通路の要所を占め、先史時代から海を通じた東西交通と交流の中で発展を遂げてきました。市内から出土する縄文時代の石器には大分県姫島や島根県隠岐島産の黒曜石や香川県産の讃岐石が含まれており、すでに海を越えた交流が発達していたことが分かります。

縄文時代の終わり頃、太山寺の大淵遺跡に北部九州から稲作が伝わりました。稲作が広まると松山平野のあちこちに大きな集落が営まれるようになりますが、この中でも特に大規模なものが紀元前後に営まれた集落である愛媛大学城北キャンパス一帯に広がる「文京遺跡」です。「文京遺跡」からは、巨大な神殿的な掘立柱建物や祭壇と共に、広島や岡山、香川、山口、九州、近畿圏の土器や石器が出土しているほか、中国製の鏡の一部や鉄器など希少な遺物が多数出土しており、その繁栄と交流圏の広さを知ることができます。

古墳時代では、特に大和の影響を伝えるのが重要文化財「愛媛県朝日谷二号墳出土品」です。朝日谷二号墳は、3世紀後半頃に大峰ヶ台の北側丘陵に築造された松山平野最古の前方後円墳で、後円部の埋葬施設からは、中国製の銅鏡2面のほか銅製や鉄製の矢じりなど金属製品が多数出土しました。これらは全国的に見ても極めて貴重な品々であり、古墳時代前期の松山平野を治めた首長が大和との交流の中で手に入れた副葬品と考えられ、瀬戸内海を一望する高台に築かれた古墳とその出土品からは、被葬者が瀬戸内海の交流を治めた権力者であったことをうかがい知ることができます。古墳時代後期の国史跡「葉佐池古墳」は、古事記に記された殯が実際に行われていたことが初めて証明された遺跡であり、モガリの習俗が地方まで浸透していたことを示しています。国史跡「久米官衙遺跡群 久米官衙遺跡 来住廃寺跡」は舒明天皇の伊予温湯宮と斉明天皇の石湯行宮に推定され、官衙施設が充実し、官衙附属寺院である来住廃寺が成立するなど、律令体制下における地方支配の進展が具体的に把握できます。このように、大和との交通と交流の中で松山の歴史は切り開かれていきました。

(9) 瀬戸内海の往来が生んだくらしと文化

波が穏やかで島々の点在する瀬戸内海は、古来より、畿内と北部九州、大陸を結ぶ大動脈としての役割を果たしてきました。また、大きな干満差と多くの島々によって生まれる激しい潮流は、これを利用した海上交通の発展と汐待や風待による港の発達に寄与しました。その往来の始まりは、石器の石材から明らかなように縄文時代までさかのぼります。

このような地理的環境で、中世において海上交通路を支配下に置き発展を遂げた河野氏と忽那氏の影響によってさまざまな生活文化が育まれました。また、「鹿島の櫂練り」や「興居島の船踊り」、三津の渡しのようにその源流を中世に求める海辺の文化財が多数生まれたことも特筆すべき点です。

近世には、松山城を築城した加藤嘉明が三津浜を開発、港を整備したことで、参勤交代の御用船の基地となるなど、物資が集積する松山の外港として発展しました。現在も、松山藩が設置したお茶屋井戸や、御船手の用水として設置された辻井戸が残されているほか、古三津には加藤嘉明の朝鮮半島での活躍を伝える「虎舞」が伝わり、近世の三津の歴史文化を伝えています。また、津和地島は、公航路の要衝で水が豊富な良港であったことから、「常燈の鼻」に常夜燈が灯され、幕府のお茶屋が置かれました。津和地のお茶屋では幕府の御用船や諸大名の公用船に補給などの便宜が図られたことから、商業活動が大いに発展しました。忽那諸島のその他の島々も潮待や風待の民間船舶が多く停泊したようで、商業活動が盛んに行われました。特に粟井は天領であったことから御用米等の海運業が盛んで、桑名神社の船絵馬や寄進石にそ

の繁栄を偲ばせます。また、野^の忽^{ぐつ}那^な島^{しま}や睦^{むつ}月^{つき}島^{しま}では、幕末頃から海路を活かした伊予^{いよ}絣^は等の行商が盛んになり、昭和初期頃まで島民のほとんどが携わる一大産業となりました。睦月島の屋敷群は行商で財を成した人々が建てたもので、特徴的な歴史的景観を形成しています。

明治以降、高浜や和気、堀^{ほり}江^えなどの港も発展を遂げますが、三津浜は漁港として、また物資の集積する港湾都市として旧松山城下を凌ぐほどの繁栄を極めます。太平洋戦争の戦火を免れた三津には、登録有形文化財「木村家住宅」や「森家住宅」をはじめとする明治から昭和初期にかけての建造物が多数残されており、その繁栄と人々の生活を今に伝えています。

このように、松山の歴史文化と発展は常に瀬戸内海の往来と共にあったといえ、特に島嶼部や沿岸部で育まれた人々の暮らしに関連する文化は松山の大きな歴史的特性といえます。

(10) 松山でくらす人々の舞台となる自然

松山市は、氷河期には、本州と陸続きでしたが、海進や隆起、沈降を経て、現在の姿が形作られました。現在の松山市には、朝鮮半島と日本が陸続きであった頃に分布したといわれる、「イヨスミレ」や「エヒメアヤメ」が自生しており、古来の松山の姿の一部が今もなお残されています。市域の東側には高縄山塊と石鎚山系がそびえ、重信川と石手川が形成した扇状地である肥沃な松山平野の先に、穏やかで美しい瀬戸内海が広がります。特に、穏やかな瀬戸内海に点在する島々は、海岸からの眺め、航行する船からの眺めなど、角度や位置の違いによって、さまざまな多島海景観として眺望できます。こうした美しい地理的環境の一部は、瀬戸内海国立公園として指定されています。

地球の躍動の中で生まれた美しく豊かな自然環境は、これまでに記述した10のストーリーの舞台となっており、松山市の歴史文化の特性のひとつであるといえます。